

私のおすすめ本

柏木柚香 専任講師
(計量経済学)

『ヒューマン・ネットワーク—人づきあいの経済学』 マシュー・ジャクソン著

早川書房 2020年

この本は、スタンフォード大学経済学部教授の“The Human Network-How Your Social Position Determines Your Power, Beliefs, and Behaviors-“という本の邦訳版である。原書のサブタイトルにある通り、人と人とのつながりに代表される社会経済ネットワークの力とそれがもつ意味について書かれた一冊である。この本は経済学のフロンティアの一部を紹介しているが実生活に根ざした学びを提供してくれるので比較的簡単に読み進めることができるはずだ。現代社会では人と人がより簡単につながれるようになり、常時つながっていられるようになった。だからこそ逆につながりを意識的に取捨選択する必要もでてきている。巷では、コロナ禍はつながりが希薄になり辛かったという声もあれば、本当に仲の良い友達以外とのつきあいが減って良かったなどという声も聞こえてくる。コロナ前の日常が戻りつつある今、他人との付き合い方に迷っている人も多いのではないだろうか。そんな時代にぴったりな本として紹介したい。本書の中で著者は、様々な角度から人と人とのつながりについて検討し、「その人の周囲にいる人々を見ればその人がわかる」と結論付けている。例えば収入や幸福度、学力、健康など幅広い側面が身近な人々が織りなすネットワークやその構造によって決まってくるらしい。また、ある人が別の人をどう扱うかを知りたいければ、二人が含まれるネットワークをみると推測できるという。読者自身や身近な人のケースに置き換えながら読んでみてほしい。さらに、本書はマクロな視点から政治や金融の問題をネットワークの観点で分析する事例も紹介している。例えば、個々の好みや少数の偏った意見がどのように大きな社会的影響を引き起こすのかについても掘り下げている。このように、この本は、個人の間人間関係から社会の成り立ちに至るまで様々な現代の課題・現象に対し新たな視点を提供する貴重な一冊である。

◎おすすめポイント

人との交流が増えてきた今、人と人とのつながりについて考えてみよう。

『巨大災害・リスクと経済』 澤田康幸編

日経 BP マーケティング 2014年

昨今の復興政策やニュースの論調を踏まえれば経済学の中で災害を扱うことに驚きはないかもしれないが、実は経済学者が災害について本格的に研究をするようになったのは21世紀に入ってからであると言われており、その最初の専門学術誌である *Economics of*

Disasters and Climate Change が創刊されたのも 2017 年と比較的新しい。この本はその前夜（2014 年）に、東京大学経済学部の澤田康幸教授を始め、日本でこの分野を牽引する経済学者らによって執筆されたものである。この分野の研究をまとめている日本語の本は少ないが、この本を読むことで源流を垣間見ることができるだろう。データ制約が今よりもきつかった頃に行われた研究が多いが、災害の長期的影響に関する議論や、被害をいかにして最小限にとどめ立ち直るかということについて、著者の先生方が東日本大震災直後に書かれた論文等をベースに経済学の知見から幅広く議論されている。かつて災害は一定水準の範囲内で、また被災範囲も狭い範囲で収まるものと考えられ、工学的な抑止策の開発が進めば解決できる問題だと考えられてきた節がある。しかし、近年、被害を引き起こすような災害の頻度が上がり、同時多発的に災害に対処せねばならないケースも多い。またフロー被害まで含めれば 1 つの災害事例でも非常に広範囲に影響が及ぶようになってきた。この本を読めば、長期にわたる災害前後のプロセスにおいてどのような視点をもって政策を検討しなければいけないのかということへの示唆が得られるだろう。

◎おすすめポイント

人との交流が増えてきた今、人と人とのつながりについて考えてみよう。

筆者自己紹介

柏木 柚香（かしわぎ ゆずか）

早稲田大学政治経済学部卒、同大学経済学研究科博士課程修了。博士（経済学）。東京理科大学経営学部ビジネスエコノミクス学科助教などを経て今年度より日本大学経済学部専任講師。専門は、応用ミクロ計量経済学、災害の経済学。